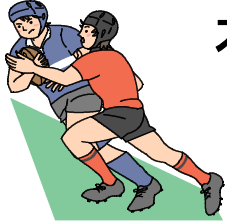


# 啐啄

N0.736

☎ 25-5125  
☎ 25-3150



## 本物の「ONE TEAM (ワンチーム)」

校長 峯 明 紀

後期がスタートして1ヶ月過ぎました。この間、先月号でもお知らせしましたが、「運動会」や「校内マラソン大会」、そして11月に入ってからたて割り班による「すずかけ集会」と全校で実施する教育活動を実施してまいりました。一つ一つの活動をこなしながら、子どもたちは「元気、やる気・根気」の力を高めながら成長していることを実感しています。12月には参観日を実施予定ですが、是非とも子どもの成長した姿を見ていただければと思っています。

さて、今回の標題である「ONE TEAM (ワンチーム)」ですが、御存じのとおり昨年日本で開催されたラグビーワールドカップ杯で、日本代表を指揮したジェイミー・ジョセフ氏が考えたスローガンです。また、昨年の「ユーキャン新語・流行語大賞」にも選ばれています。この時の日本代表は、総数31人のうちのおよそ半数を占める15人が外国人という多国籍チーム。生まれた国も育った文化も異なるさまざまな選手たちをひとつにまとめ上げるために、ジョセフ氏はこのスローガンを掲げました。「ONE TEAM」のもとに一致団結した選手たちは、次々と勝利を重ね、日本史上初の予選グループ突破に成功。日本代表の活躍が、多くの人に勇気や希望を与えてくれたことは、記憶にも新しいと思います。その「ONE TEAM」の意味について、当時のチームドクターである高森草平さんが、NHKの取材に応えたインタビューの一部を紹介します。

「ONE TEAM」ということばは、今やさまざまな場面でいわば「乱発」されているように見受けられます。本家の日本代表における「ONE TEAM」。高森さんはどんなチームだったと感じているのでしょうか。

高森さん「それぞれがプロに徹していました。決して仲よしこよしではありませんでした。一定の距離感を持ち、時にギスギスした感じもありました。近すぎる関係はよくないんです」

取材中、高森さんは「コミュニケーション」と「信頼関係」の重要性を繰り返し強調しました。ただ「近すぎる関係」は、時としてプロとしての判断に「ノイズが入る」と高森さんは言い切ります。

高森さん「ジョセフヘッドコーチとの関係も対等だったと感じています。選手、コーチ、メディカル、フィジカル、マネージメント、通訳…それぞれの部門のプロが本音と本音でぶつかり合い高め合った「ONE TEAM」でした。」

「ONE TEAM」の一員だったことの「自負や誇り」をどう感じているか聞くと、高森さんはチームが解散する最後のミーティングの直前、ある外国出身の選手にかけられたことばを明かしてくれました。

高森さん「最後に『先生ありがとう。』と言ってくれたことですね。」  
短く語った高森さん、何よりも大事にする「コミュニケーション」と「信頼関係」をもとに、自分の仕事をやり遂げた充実感にあふれていました。

子どもたちも教職員も「新井田小学校」の一員として「自負や誇り」をもち、けっして「仲よしこよし」の近い関係ではなく、お互いに本音と本音でぶつかり合いながらもお互いを信頼し合い高め合える。そして、最後には「ありがとう!」と言い合える、そんな本物の「ONE TEAM」をこれからもめざしたいと志を新たにしたところです。



「啐啄」(そったく): 「啐」は卵がかえる時、殻の中で雛がつつく音、  
「啄」は母鶏が殻をかみ破ること。